

秀賞

母の1ページ

秋田県羽後町立羽後中学校

3年 稲富 一華

「どうしてこんなことばかり、いつまで、どのくらい続けていかなければいけないの。もう嫌だ。逃げ出したい。」

ひどく殴り書きされた文字で綴られた、心の中から一気に溢れ出したような言葉。私の母は、「脳幹梗塞」という病気で合計約6年という時間を病院の中で過ごしてきた。そのときに書かれた日記の、ある1ページの言葉だ。突然現れたその言葉の重さに息をのむ。喉が詰まる。胸の辺りがぎゅっと苦しくなるような、言葉にはならない感情が込み上げてきた。

私も毎日のように、同じような言葉を発していた。中学校3年生の夏休み。テスト、進学、将来と、悩みは尽きない。「なんでこんなことばかりやらなければいけないの」「もう本当に嫌だ」「お母さんに私の大変さの何がわかるの」と、思うようにいかなかったり都合が悪くなったりしたとき、私は口癖のように母にこれらの言葉をぶつけてきた。今考えてみると単なる甘えやわがままだった。そんな私を見かねたのか、まだ体のバランスをとることが苦手な母が、数冊の日記を持ってきた。存在自体は知っていた母の日記。これまでしっかりと知らなかった母の入院生活や病気について興味があり、頼んではみたものの、決して見せてくれることはなかった。しかし、こんな形で母の日記を見ることになるとは思ってもよらなかった。

入院中の母は、私のように誰かに甘え、わがまを言えただろうか。家族にもめったに会えず、一人で黙々と病院でリハビリを続け、同じことを何度も繰り返し練習していた。うまくいなくても、思うように進まなくても逃げ出すことなくやってきたのだ。私はそんな母の姿から、どんなときも前へ進もうとするたくましさ、強さだけを感じてきた。しかし、たった1ページ、苦しい現状から逃げ出したくなる日があったのだ。いや、書かれていないだけで、たくさんあったはずだ。本当は何年も何冊も、毎日そう書き続けたかった、叫びたかったのだと思う。私はその日記を読んで以来、母に対して自分が口癖のように吐き出していた言葉も、ためらうことなく心的心声を母にぶつけていたことも、恥ずかしく思うようになった。母はどんな気持ちで私の甘えた言葉を聞いていたのだろうか。

すべての努力が望んだ結果をもたらすとは限らない。それでもそれを承知で、母は病気と6年間も闘ってきた。さまざまな不自由を、リハビリで克服してき

た。母の努力を裏付けるような出来事を思い出す。

昨年の3月の下旬、一つ下の妹が小学校を卒業した2週間後のことである。卒業式の写真を見た母の主治医の先生から、母にこんな手紙が届けられた。

「写真を拝見し、実は感動していました。しかし感動をお伝えすることで、再び術後の闘病生活を思い起こさせてしまうのではないかと、今日まで伝えるのを躊躇しておりました。でもやっぱりすごいことなので、お伝えすることにしました。

卒業式にしっかり両手で鞆を持ち、両足でしっかり立って娘さんに寄り添う姿は、手術後のカルテの記録と所見、手術記事を思い返すと奇跡だと思います。」

主治医の先生が2週間も伝えるのをためらうほど、母に思い出させたくないような時間があったのだ。鞆を持つことや、自分の足で立っていることが「奇跡」のように感じられるほどの苦しい時間が。元気になった今でこそ見た目には分かりにくいですが、日記を持って歩き、私に渡すといった些細なことも、母にとっては一苦勞のはずだ。

私は、母に何度もなげやりな態度をとり、諦めや現実逃避の言葉をぶつけてきたが、それを言う資格があるほど努力してきただろうか。中学校3年生の私が今抱えているテストや進路、将来についての迷いや悩みは、母の想像を絶する覚悟や勇気の中から、たった1ページに溢れ出てきた言葉とは比にならないほど小さい。

日記を読んだことで、想定外に心がえぐられた一方で、私の心は強くなった。殴り書きされ、涙でにじんだ字も、しわくちゃになったあの1ページも、私は絶対に忘れてはいけない。あの1ページが私の心の中にあれば何があっても大丈夫。母の覚悟と勇気が私を奮い立たせてくれる。

私はこの先の進路選択や高校受験などをはじめ、多くの悩みに直面するだろう。そしてなげやりな気持ちになったり、諦めの言葉を発したくなったりする瞬間を何度も迎えると思う。そんなときに私の背中を押してくれるエネルギー、それは母のあの日記の1ページを思い出すことであり、また、それを克服した目の前にいる母の姿だ。